

---

# 天翔天女 サザンドリフト

黒崎 あい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天翔天女 サザンドリフト

### 【Nコード】

N9762A

### 【作者名】

黒崎 あい

### 【あらすじ】

2080年京都、初夏。50年に1度の竜神祭は、超常現象とともにこの世から最も遠い人間を連れてきた。伝説の陰陽道大家・日向宗家と、魔界最高層の魔神・紅竜毅を父母にもつ、紅眼緋髪の日向炎。現代の女子高生兼、由緒正しい永翠神社の巫女をも務める、浅田みどり。各々が自らの宿命と立ち向かい、やがて皆同じ場所へ辿りつくことになる。ひとつの時空石が紡ぐ、1000年の物語。

## interlude

### 十六の時

突如現れた謎の女

それが人間ではないことはわかっていた

特定はできなかったが・・・おそらく名のある魔界の妖怪

「貴方の子をつくらせて」

墮とされた振りをした

その先にある彼女の本当の目的を知りたかったから

彼女が子を産むまでに半年もかからなかった

久々に再会した彼女は見るからにやつれていた

肌はざらりと枯れはて、ふくよかだった胸は板のようになり、甘  
美な唇は老婆のように皺寄せた

まるで生まれた子供に生命の殆どを吸い取られたかのように

瞳に、わずかな後悔の念

「こっちは」そなたにくれてやる」

鋭く言いはなち、彼女は最後に本来の姿をさらした  
挑発するかのよう

長大な、紅い竜

神々しいまでのその姿

そうして一瞬にして消えた

腕の中に、大声で泣き続ける赤ん坊だけが残った

夕日が沈む間際に放つ、断末魔の色をした両眼

そいつに名前を与えた

「炎」

## 第1章 漂流者

### 第 1 章 “漂流者”

1

淡い夕闇がたちこめている。

古びた純和風家屋。中庭に面した縁側に腰をおろし、少女がひとり、夢の淵にまどろんでいた。艶のある長い髪に、美人というよりは可愛らしい面持ち。半袖シャツにハーフパンツ、それに白足袋を履くという奇妙な格好をしているのは、舞台稽古から帰ってきてそのまま、この場所で眠りこんでしまったからである。

「みどり」

優しく揺すられ、浅田みどり、はぼんやりと目を覚ました。振り仰ぐと、老齡の母が穏やかに微笑んでいる。

「ごめん、寝ちゃってた」

「今日までの疲れだよ」ふくよかな温かい手が、みどりの髪をそっと撫でた。

「さあもう一息だ。精一杯やっておいで」

「うん」

「ちよっとお腹に入れていきなさい。どうせお昼とってないんでしょ」

「食べたよ」

「どこで」

「シユンのところ。おばさんがご馳走してくれた。今日は本番だから、体力つけなきゃって」

「そうだったの。よくお礼言った」

「言った」

心持ち丸まった背中が奥の台所へと消えた。

今年、みどりの母はついに八十を数える。かつて祇園一の花形舞妓としてその名を馳せ、結婚して引退してからも、ここお茶屋「はなを」のスパルタ女将として、若手の育成に熱をそそぐパワフルな人である。

ちなみに、現在17歳のみどりのことは、決して高齢出産だったわけではない。みどりは子供のなかった熟年夫婦に引きとられた、「捨て子」だったのである。とはいえ、この里親の愛の貯蔵量といったら、サウジアラビアの石油資源も匹敵できないほどの枯渇知らずだった。そのおかげで、いちおうは健全な人格と、血色の良い頬、生氣さんと輝く目を持ちえた一人娘なのであった。

みどりは思いきり背伸びをすると、中庭の井戸水で眠気をはらった。部屋に上がると、床の間に卸したての衣装が目にとまった。この日のために新調した舞台装束である。白の下着に緋色の差し貫、金の花天冠。手にとると、ずしりと重い。帯紐の数まで念入りに確認し、皺の寄らないよう丁寧に風呂敷に包み、紙袋に詰めた。

「今晚は快晴ですって」台所から母の声がとんだ。  
食卓につき、みどりは目を丸くした。

「こんなに食べたら踊れないよ！」

「大丈夫よ。それまでに緊張で消化するから」

「また、追いうちを・・・」

むすつとして箸を進める娘を、母は感慨深い笑みで見つめた。

「時の経つの早いこと。あなたが『鎮魂の舞』を踊る日が来るなんて」

「はいはい」口をもぐもぐさせながら、みどりは淡々と言った。

「私が踊ったのがまるで昨日のことのようだって、ここ一週間で

何回言ってると思う？三十八回よ」

「あら、あなたも厭な趣味してるわ。そんなの数えてる暇があったら、さっさと稽古に励む」

「そればかり」

「あと四年・・・あの人が、頑張ってくれればね」母はため息と同時に、肩を撫でおろした。

妻と十もの年齢差があつたみどりの父は、誰もが口を揃える大往生だつた。

「シユンのお母さんが言つてた。娘一世一代の晴れ舞台を、三途の川を逆走してでも見にくるだろうつて」

「一世一代の大惨事にならなければいいけど」

「ふん。絶対に私の踊りを認めてもらうわよ」

「そうですね。頼もしい限りですこと」

二人は顔を見合わせ、クスクスと笑つた。

「ご馳走様」

みどりは食器を流しに片すと、廊下を何度か往復した。

玄関にまとめられた紙袋の山を見て、母は気の毒そうに言う。

「やつぱりお母さん、半分手伝おうか」

「大丈夫」

「そうは言つてもあなたこれ」

みどりはスニーカーに細い足を通しながら、さらりと言つた。「

宅配人は雇つてあるの」

丁度その時である。

「お邪魔します。みどり！来てやつたぞ」

表で木戸のながらから開く音が響いた。

「えっ、みどり。宅配人つて」

困惑顔の母をよそに、かかとを踏みつけたまま外へ出たみどりは、声の主を見るなりわざとらしく甘えてみせた。

「シユン！待つてたよ」

近所の幼馴染みであり、幼稚園三年間、小学校六年間、中学校三

年間という脅威のクサレ縁を共にした、シユンこと渡瀬 舜である。やわらかなアツシユカラーにブリーチした短髪を、無造作にワツクスで立たせている。家系のどこをあさっても純日本人しか出てこない渡瀬家で、アイリツシユな淡いグレーの瞳を持っているのは、彼を除いて飼猫のドラしかいない。

華奢なみどりを押しのけ、うえつと一言、「これ全部持つてくわけ」と、親友はうめいた。

「まあね」

てきぱきと手渡されるまま、大きな両手が荷物まみれになっていく。

「・・・おい、明らかにおかしいだろ。なんでお前が手ぶらで俺がフルなんだ」

「んじゃ一個持つよ」

「んじゃつて、あなた俺が言わなければ手ぶらで悠々とハイキングするつもりだったの!」

「まさか。いくら私でもそこまで薄情な真似はしないよ」

みどりは何食わぬ顔で自転車を引っぱってきた。

「えつ、それ反則だろ」

電車に揺られて一時間。

叡山鉄道終点駅・鞍馬で下車したのは、みどりと舜、腰の曲がった老夫婦、それに、風呂敷包みを抱えこんだ中年の女性の五人だけだった。

駅舎には大きな天狗の面が飾られている。幼いころ、みどりはここへ来るたびに、天井から睨みをきかせる赤い憤怒の形相と視線を合わせないよう努めた。

導入して間もない自動改札機を抜け、見慣れた駅前に出た。鞍馬は京都盆地の北にある静かな温泉地で、周囲を貴船山、鞍馬山、金比羅山のなだらかな山々に囲まれている。青葉の季節を迎え、ちらほらと訪れる観光客には、年配の男女が目立つ。みやげもの屋が軒

を連ねる上り坂はゆるりと続いて、店先から漂ってくる香ばしい匂いは木の芽煮という地域名産品である。

「あんまり変わってないな」

舜は無表情にそう言ったが、なんとなく声が弾んでいた。

「私に引っぱられて、よく来たもんね」

「懐かしいよ」

二人こうして歩くのは久しぶりだった。中学卒業後、それまで生活の一部でもあったシユンという存在は、十五年の歳月が夢のようにぱっと日常から消えてしまった。みどりは本格的な舞妓修行がはじまり、夜は夜間高校に通う生活である。舜は地元の普通高校を受けたが、中学のころに樹立したスポーツテスト全国8位の記録が災いし、さっそく部活勧誘の目玉商品に祭り上げられ、柄にもなくバスケ部の新人エースに落ち着いてしまった。「下手にはりきらなきゃよかった」。金の額縁に収まった栄光の表彰状をながめ、舜は心底後悔しているように見えた。

高校に入って舜は変わった。眉なんてみどりの知るかぎりイモ虫の天然記念物だったのに、当時の半分以下の濃度と半分以下の好印象になってしまった。自然現象としては、それまでみどりと五十歩百歩だった背丈がタケノコの如くしゆるしゆる伸びて、まったくもって可愛げがないのである。だが、身体能力にしても頭脳にしても潜在能力は恐ろしいものを秘めているのに、出し惜しみというか何とというか、周囲に露呈するのを面倒くさがり、能力値に見合った積極性がないところは、相変わらずであった。

目的の神社までは当分かかると思われた。鞍馬寺まではケーブルカーが開通しているが、それを過ぎると、貴船山へ通じる人気のない山道をしばらく歩き続ける。老木の根が相互にからみあい地面の上に張りだしている。ここは僧正ヶ谷といって、幼い日の源義経が毎晩遅くに鞍馬寺を抜けだし、平家討伐を期した修行を行っていたという由縁がある。古くから物の怪が住むといわれ、あまり人の寄

りついた場所ではない。

舜の日に焼けた額を滴がしたたり落ちた。

「まじ、きつつ・・・」

「代わるうか？」

さすがのみどりも親友を気遣いはじめるが、それには答えず、舜はむつつりと先を行く。しんとした山の靈気の中に、二つの足音だけが一定のリズムを刻んでいく。やがて、両側に朽ちた灯籠の立ちならぶ参道が、森の奥深く姿を現すと、朱色も剥げかけた幾つもの鳥居をくぐり、提灯の明かりとぼろぼろの社、そしてはじめて人の声を耳にする。

「見えた！」二人の声がダブった。

いち早く大鳥居をくぐったみどりの前を、お面を付けた子供達が、きやつきやとはしゃぎながら走り去っていった。境内では厄除けの炎がごうごうと燃え、一番星が輝きはじめた藍色の夜空に勢い良く火花を散らしている。

背後でどさりという音とともに舜が崩れおちた。頬が蒸気をおびている。

「バスケ部のエースが、不甲斐ないな」みどりが茶化した。

「俺の苦勞も知らずにのうのうと・・・」

「ごめんごめん！冗談だよ。後は私が運ぶから」

「しんどー」

「シューーン！」

「なんだよ」

「かき氷！何がいいー？」

「解ってるでしょー。俺はオールウェイズ、いちごなのー」

ついでに出店で団扇も買った。無理を引き受けてくれた幼馴染みへの手厚い御礼である。

「本当にありがとうね」

かき氷を手渡すと、みどりはまだ脈の落ち着かない舜の隣に座り、ぱたぱたと風を送ってやった。しかし舜はそれを制し、みどりの手

から団扇を引きぬくと、

「いいから。行けって」無愛想な声がとんだ。

「ごめん・・・」

「ばか、違うよ。みどりは準備とか挨拶回りとか色々あるんだろ」

「そうだけど」

それでも具合悪そうに動かないみどりを見て、舜の口元が悪戯っぽく歪んだ。

「解った。不安なんだ。失敗したらどうしようとか、そんなことばかり考えて」

「ば、馬鹿にしないで。余裕よ」

「ふーん」にやにやしている。

「俺、最前列で見てるからな」

みどりは目を丸くした。「性格悪くない」

「今に始まったことじゃないだろ。踊る前に、絶対俺を見るよな」

「変な約束とりつけないで。ますます混乱するでしょう」

「ははっ、頑張れよ」

お調子者は応援歌を歌いはじめたので、みどりはたまらずその場から離れた。

後々ふと気持ちが悪くなったことに気づいて、自分も舜の扱いに慣れているが、舜もまた自分の扱いに慣れていると感じ、自然と笑みがこぼれるのだった。

永翠神社・竜神祭 50年周期の開催年にあたるこの年、地元

町鞍馬はささやかな祝福ムードにつつまれた。神社の建立は平安時代初期といわれ、御祭神がきわめて特異なことから、歴史の表舞台に名を躍らせることはなかったが、みどりの父方の家系である浅田家は、10世紀に渡るあいだ世を忍んでこの神社を護ってきたという。みどりが幼いころ子守唄代わりに父が語ってくれたのは、決ま

つて、永翠神社にまつわる神話的な伝説だった。

遡ること、遙か1000年以上も前のこと。

平安遷都より1世紀半が過ぎたころ、中央政府では藤原氏とくに北家が天皇と結びついて、まもなく摂関政治のもと不動の地位を築こうとしていた。

このころ京の都は目に余る荒みようで、8世紀後半から満を持して崩れはじめた律令制度の影響は、農村から中央へと徐々に影響をきたし、国家の財政はもとより、軍備にも多大な痛手をもよおした。そのうえ、重税にあえぐ農民に輪をかけてのしかかったのは、天候の不順や虫害による飢饉と疫病だった。政界でも血なまぐさい陰謀と暗殺の影がうごめいて、人間の放つ陰の気が、まったく別次元の「魔界」と呼ばれる異世界と共鳴し、両界が誘引しあい、魔界が人間界を侵食しはじめるといふ事態に陥った。魔界の邪気は人間の精神を汚染し、人間の怨霊とか怨念といったものを喰らう魔界の住民人々は彼らを妖怪、魔物と呼んだ。も増殖し、その中心地となった都は厚い雲に覆われたようにどことなく陰気に見えた。

一方、鞍馬山に名高い鞍馬寺に、身寄りのない少年がひとり育てられていた。その両目が翡翠の色をしていることから、永翠という名で呼ばれていた。永翠は物心つかない頃から不思議な能力を持っていた。常人の見えないものが見え、超人的な念力でそれに対処することができるといふ、その噂は都へ広がり、彼は15の年に宮中へ呼ばれ、史上最年少にして中務省の陰陽頭という地位を得た。都は妖魔の巢と化していたが、彼が宮中に拠点を置いて数年もすると、跡形もなく浄化されてしまった。

しかし、当時の陰陽道における二大勢力、安部・賀茂両家の陰謀により永翠は失脚し、宮中を追われたあとは鞍馬山で隠居生活を送ることになった。妻子もでき、やがて陰陽界の第三勢力となる日向宗家の礎が、本人は知らずともしつかりと芽吹いたのである。そんなある時、鞍馬山に巨大な落雷があった。永翠が結界を施していた

のを幸いに、山ごと焼け崩れるという大惨事は逃れたが、これを発端に三日三晩の大嵐が京を襲った。川は暴走し、突風は渦を巻いて木々や建物をなぎ倒し、ついには空が広大な雲海で覆われ、一切の光が遮断されたのである。

天変地異の首謀者は、魔界も最高層に君臨する竜神で『紅竜毅』といった。三千世界に散った天竜八部衆の一角で、天空を覆いつくすほどの長大な身体に、赤みがかった黄金の鱗、火花がほとばしる二つの角を持っていた。

永翠は自らの生命を代償に、竜神を鞍馬山に封印した。白銀のリングが竜神を包んだとき、その身体は内側から灼熱の白光を発して粉々に崩壊してゆき、やがて豪雨となり鞍馬山に降りそそぎ、黒々とした深い池を形成した。

人々はこの池を竜神池と呼び、竜神とひとりの僧侶の魂の墓場として丁重に祭った。まもなく永翠の妻子を中心に池の鎮守として建てられた神社が、ここ永翠神社である。

現在も50年に1度だけ、2つの御霊を鎮めるための竜神祭が催され、永翠が愛したといわれる『鎮魂の舞』を選ばれた巫女が踊るのがしきたりとなっている。肝心の踊り子はこの伝説をまったく信じていないときているが……

拜殿の前に設置された舞台はすっかり装いを整えていた。ヒノキの床板には白地に金の刺繍が入った幕がめぐらされ、四隅にかげられた松明が赤々と輝いている。左右の楽舎につながる渡り廊下には赤い敷物が敷かれ、烏帽子に狩衣をつけた楽人たちが、それぞれの楽器を手に黙々と調整を行っているのが見える。

まもなく式典が始まった。舞台上に神籠をしつらい、御祓いが行われるのだ。みどりの父が死んだあと、六歳年下の弟が神主を継いでいた。小柄ながらがっしりとした風体に、灰色の無精髭がよく似合っている。叔父は無口な人だったが、みどりが鞍馬の実家へ遊び

に行くたび、七福神のように破顔して、帰るときには必ず何かひとつ家具を壊していく幼い姪を歓迎した。

みどりが舞台の裏手にまわると、待つてましたと言わんばかり、町内会のおばさん達がみどりを取り囲んだ。されるがまま迅速に衣装を着せられていく。次に鏡の前に座らされ、三人がかりで化粧が施される。髪を結うのは、祇園の舞妓がお勤めのたびにお世話になっている、みどりも顔なじみの美容師で、気さくで舌の回る彼女とはいつも会話が絶えないのだが、緊迫した空気を察してか、彼女が話しかけないでくれたのは、今日ばかりは大いにありがたかった。いよいよ支度が整うと、次々と激励の言葉をかけられて、いまやみどりはそれに愛想よく応えることすら難しかった。時間が刻々と迫るにつれ、心の中の小心者が頭をもたげてくる。

「楽しんでください」

不意に肩を抱かれ、みどりはあつと声を発した。母が、いや、先代の踊り手が励ましに来てくれていたのだ。みどりは身の引きしまる思いで腹筋に力をこめた。

まもなく太鼓と法螺貝が吹かれ、拝殿から紙覆面をした社人が、手に手に供物を持ち、大股にすり足で出てきた。すべてお供えが終了すると、他の明かりがすべて消えた。みどりは祈るような気持ちで瞳を閉じた。

シャラン・・・

凜と鳴る、清らかな鈴の音。

足元に視線を落としたまま、滑るように廊下を進む。

舞台の中央に出ると、みどりはゆっくりと顔を上げた。鞍馬にはこんな人がいたのかと内心驚く。言葉通り最前列のど真ん中に、舜は立っていた。わずか数秒にも満たない間、視線で会話があった。「がんばれ」「だいじょうぶ」。舜が笑んだのを見た。

みどりは大きく振りかぶると、ゆるやかに一步を踏んだ。

行ける！

高く、低く、しなやかに、しなやかに。

笛の旋律に身を任せるまま、神に操られた蝶のように、みどりは光の舞台を音もなく舞った。練習の時にはなかった感覚が、身体の隅々まで潤っていくのがわかった。あらかじめ自分と共鳴するように作られたかのような、この旋律、この動き。みどりは夢中になつて踊った。

そのあと自分がどう踊っていたのかは、恥ずかしながら曖昧にしか思い出せないが、気がつけば割れんばかりの喝采が巻きおこっており、鎮魂の舞の成功をみどりは呆然と悟った。本来なら静粛かつ神妙に幕をひく場なのだが、会場の沸きようはあまりに常軌を逸していた。観衆の中に母の姿を見つけると、なにやら慌てた様子で身振り手振り訴えているのがわかった。みどりは弾かれたように頭を下げた。

こうして「厳粛な」神宴のメインイベントは、体育会系の敬礼をもってシメられたのであった。

その夜、確かに空は晴れていた。宇宙へ透き通るような快晴だったのだ。

人ごみから少し離れた木陰に腰かけて、みどりはまだ余韻に浸っていた。踊りきった。あの『鎮魂の舞』を、自分が！膨大な時間をこの日のために費やしてきて、いま初めて歴史の一部を手にした思いがする。肝心の信心深さには欠けるみどりだったが、伝説の内容はともかく、千年の時を経た永翠神社秘蔵の歴史書に、25代目巫女として自筆の署名を残せることには、やはり感慨深いものがあった。

とその時、みどりは突然背筋が凍ったのを感じた。

「・・・」

本当に何気なく夜空を仰いだ。月が輝くはずの、星がまたたくは

ずの、碧く黒い夜空を。

しかし何か異常だった。いつ流れてきたのか、はたまた何処から流れてきたのか、月を隠すかたちで雲がたなびいていた。まもなくして、感覚として抱いていた異常の文字は、明白に形をおびたそれへと変わっていった。月を中心に、全天から雲が集結しはじめている。しかもその速度は超常現象と称して過言ではなかった。

はしゃいでいた幼い子供が母親の手にしがみついてぐずりだす。会場にもぼつぼつと異変に気づいた人々が現れはじめた。みどりも脱けがらのようになって、その‘おかしな’光景を眺めていた。次期それは雲海と呼べるほどに巨大化し、いまや完全に星屑のきらめきを覆い隠して、なおも成長を続けている。雲海内の放電に触発され、会場が一斉停電に陥った。

「みどり！」

幼馴染みの引きつった声で、みどりははっと我に返った。

「何がどうなってるんだよ」

「わ、わかんないよ」

稲光が二人の蒼白な顔を白く照らしている。やがて雲海は、地を這うような鈍い音とともにとぐるを巻きはじめた。風が唸る。森がざわめく。そうして天高く築かれたドラゴンの巣、その渦の中心がぴかっと裂けた。裂け目から焼けるような眩い光が射しこみ、天と地の間に白銀の光柱が立つたかに見えた。

誰もが愕然と立ちつくすなか、その時みどりのとつた行動は突発的でかつ非・理性的だったに違いない。舞の衣装をその場に脱ぎすて、傍の屋台に置いてあった懐中電灯を引つつかむと、光柱の落ちた場所を一点に凝視しながら、疾風のように走りだした。

「おい、どこ行くんだよ！」

舜が驚いて止めようとしたが、彼の大きな手は空しく宙をつかんだだけだった。

起こした行動を本人もよく理解していない。ただ、みどりには鼓動の高鳴りだけがあった。露出した木の根が行く手を阻もうと絡み

つく。目標の光柱はやがて薄れつつあった・・・

そうしてどのくらい走り続けただろう。

頭上の雲は切れ、白い月が顔を出していた。

光柱はすでに消滅していたが、向かう先が狐火のようにぼつと光っている。身の丈ほどの茂みに苦戦しながらも、ようやく目の前が開けた。

重力を失った光の破片がきらきらと蛍のようにあたりを舞って、その中心には竜神池が一枚の鏡のように横たわっている。みどりは誘われるように歩を進めた。幻想的な光景だった。神とも妖精ともつかない一人の少年が、光の雪をまといながら、池のほとりに倒れている。吸い寄せられるように傍へ寄ると、月光を頬に浴びて少年の顔は死人のように蒼く、そして寒気がするほど美しかった。

ゆるやかに雲海が消えていく。穏やかな星空がふたたび天上を飾り、やがて少年を包んでいた光も薄らいで、みどりの見守る中、とうとう元の闇へと帰した。

握りしめていた懐中電灯で、みどりはあらためて少年を照らした。乱れた緋色の髪、白い肌。みどりは思わず後ずさりした。その身体は、目を伏せずにはいられないほど流血にまみれて、ほとんど黒く変色している。普通の人間ならば、助けたいという気持ちよりも、まず恐怖が先に立つだろう。それでもみどりは自分を奮立たせ、少年の脇にしゃがむと、おぼつかない手つきで彼の着物をはぎ、胸元に耳をあてた。ドク、ドク、と・・・貧弱ではあるが生命の鼓動が、まるで死へのカウントダウンのようにリズムを刻んでいた。

「まだ息がある・・・」

ためらいがちに、少年の服に手をかける。そうして彼の下腹部にざっくりと開いた大穴を見たとき、みどりの声帯は凍結したように悲鳴をあげることを拒んだ。淵の岩に引っかけて真新しい紅袴をちぎり、包帯代わりにして止血を試みたが、流血はとめどなく溢れていく。誰が見てもこの少年が助からないのは明白だった。

しかしここで出会った以上、もはや彼の生命は自分が握ったのも同然である。生きるか死ぬか。それは少年の生命力とみどりの行動にかかっていた。

腹を決め、みどりが少年を抱き起こそうとした、そのときである。

「はは・・・」

かすかに、だが確かに、少年の青い唇が笑んだのだ。みどりは反射的に手を引っこめた。

少年がうつすらと目蓋を開け “それ” は、みどりの意識に鮮烈に焼きついた。

真紅の眼。

メノウの原石。いや、それよりもっと複雑な色をしている。燃えるように美しい紅。

「こんな所まで・・・追って・・・来たのか・・・」

吐息混じりの苦しそうな声だった。少年の視線はみどりを通りこして宙をさまよっている。

「殺すならさっさと・・・うつつ」

「しゃべらないで！私はあなたを殺したりしない・・・」

大量に吐血し、少年は喉をせいぜいと荒立てた。そのあまりに無残な姿に、みどりの頬を涙が伝った。

「あきらめないで。絶対に助けるからね」

みどりは少年を背に負い、ふらふらと立ちあがった。流血が染みて首筋がぬるつとした。

「絶対死んじやだめだよ！」

## 第2章 はじまり(1)

### 第2章 “はじまり”

1

鞍馬の街を、旭日が染める。

壁時計を見ると、六時を回ったところだ。夢遊病患者のように病室を出たみどりは、廊下の姿見に映った不健康そうな少女にむかって、深いため息をついた。顔を洗いに来たのだが、間違つてトイレに入っていた。のろのろと引き返し、洗面台へ向かう。あまりに長く長い夜だった。全身がきしむ・・・こっちが医者にかかりたい。

顔を洗うと、みどりは昨夜から一度も触っていなかった携帯電話を開いた。舜から五回も着信が入っている。みどりはダイヤルを押そうとしたが、指をとめた。正直、舜に昨日のことを話してよいものか、あるいはどう話せばよいものか、今のぼんやりした頭ではどうにも言葉が思いつかない。無事を知らせる内容の短いメールだけを送り、携帯をポケットに戻した。

しんとした早朝の病室には少年だけが眠っている。ほのかな甘い香りは、窓辺に飾られた百合の花である。みどりはベッドの傍らに腰かけて、しばらく少年の寝顔をながめていた。

「息があるのが不思議なくらいですよ」

少年が救急治療室に担ぎこまれ、医師が驚愕の表情を浮かべてそう叫んだのが、ざつと八時間前。「覚悟はしておいてください」と言われたものだが、少年は病院史に名を残すほどの恐るべき回復力をもって、この道数十年のベテラン医師をも感服させてみせた。

「よっぽどこの世に未練があったんでしょうな」

医師が最後に言った冗談が、どうもまんざらでもなさそうで、みどりは閉口した。

ほんの数時間前、生死をさまよった人間とは思えないほど、少年は安らかな顔をしている。しかしこうしてしみじみ見ると、なんと綺麗な男の子なのだろう。印象的なのは、幅のあるくつきりとした二重の線に、切れ長の目元。すつと通った繊細な鼻。形のよい唇。まぶたに落ちかかるさらつとした緋色の髪。なんだか色気すら感じさせる。

しかし、その身体は拷問を受けてきたかのように酷く負傷している。

この少年が、心を開いてくれるといい  
みどりは深い眠りへと落ちていった。

むさぼるように眠り続け、そうして誰かに背中を揺すられたのは、かなりの時が経過してからだと思う。ノンレム睡眠の最中に、氷の冷たさを含んだ一声が意識をついた。

「起きろ」

途端にみどりの心臓は高速スピンした。

目覚めた瞬間、目の前に銀の刃が突きつけられていた。隠しておいたはずの日本刀。少年が“腰に差していた”物である。

「騒ぐな」少年の射るような視線は殺気すら感じさせる。

「ここは何処で、お前は？なぜ俺を生かした」

「ちよつと！これを下げて・・・」

「答える」

みどりは小さく悲鳴をあげた。刃の切っ先がひやりと首筋に触れたからである。

「こ、ここは病院。私はみどり。あなたは昨夜、竜神池のほとりに重傷を負って倒れていたのよ。憶えてる？」

「・・・」

空白の時間のあと、ようやくみどりは刀から解放された。口から

安堵の息がもれる。

「わかったらちゃんと布団に戻って。あなたはまだ、とても起きられる状態じゃないの」静かに言った。

少年はしばらく動じなかったが、やがて素直に従った。枕に頭を沈めると、深く息をついた。死んだ魚のような眼で、無機質な白い天井をぼんやりとながめていたが、そのまま誰に語りかけるともなく咳きもれた。

「俺は、助かったのか」

とても生を望んでいたとは思えない、無感情な口調だった。宝石の紅眼がゆつくりと閉ざされ、一筋の涙が白磁の肌を滑ったのを、みどりは黙って見つめていた。そうして彼はただの一動もしなかったが、命の恩人への御礼がなされていないのによく気づいたようである。初めてみどりを正面から見つめた。

「助けてくれてありがとう。刀を向けたこと、許してくれ」

みどりは静かに首を振った。少年に尋ねたいことは山のようにあったが、生に放心したかのような表情を前にして、とても質問を切りだす気にはなれなかった。

「今は西暦何年だ」

唐突に、尋ねられた。

「2080年だけど、それがどうかした」

「二千だと！」

少年ががばつと跳ね起きたので、みどりはぎょつとして身を引いた。途端に悲痛なうめき声を発して、少年は腹部を抱えこんだ。

「大丈夫!？」

みどりは遠慮がちに手を差しのべた。そつと身体をさすってやる。「それなら・・・俺は、千年近くもの時を渡ってきたというのか」みどりは一瞬手術の後遺症だと思い、彼の言葉を受けとめようとはしなかった。だが、最初に出会ったときの非現実的な光景が網膜によみがえると、次第に血の気が失せていくのを感じた。少年の、時代劇から抜け出てきたような姿。ひとたび話してみれば、口に

する言葉は心なしか古風とも受けとめられなくもない。

「・・・あなたは、時を、越えて、来たって、いうの」

一言一言かみしめながら尋ねたのは、返答を予期しての、心の準備でもあった。

「お前が信じるなら、そういうことだ」

これは疑うも何も、むしろそうであったほうが納得がいった。この紅眼緋髪の美少年は、過去からやってきたのだ。それも、平安時代という途方もなく遠い時空の彼方から。

「それでああなたは何者なの」みどりはあえて淡々と訊いた。

少年の横顔がふつと硬直するのが、横目に入る。

「どうやってここまで来たの」

しかし少年は何も言おうとしない。憂いをおびた瞳は宙をただよった。

・・・いま目の前の少年に必要なのは、肉体的なものは元より精神的な休養なのかもしれない。

「名前、まだ聞いてなかったね」みどりはやわらかに微笑んだ。

「私は浅田 みどり。みどりって呼んでね」

少年はようやくやく口を開いた。

「日向 炎。えん、と・・・そう呼んでくれ」

「えん？ どういう字を書くの？」

「ほのお、の炎」

「変わってるね。でも似合ってる」

その瞬間、炎、は顔色ひとつ変えないのだが、空気がぴりつと張りつめたのを心臓で感じたような気がした。何か不味いことを言うてしまったのだろうか。みどりは避けるように話題を変えた。

「歳はいくつなの」

「十七だ」

まさか同じ歳とは思ってもよらなかった。氷の彫刻とでも形容したくなる冷艶端麗な少年に、ちょっとしただけ親しみを感じられるようになった。

「怪我が治るまではここで我慢してね。必要なものがあつたら遠慮なく言つて」

味気ない部屋を見渡して、みどりは残念そうに笑んだ。

「お医者さんも当分入院が必要だつて言つてたし」

「回復は早いんだ。遅くて十日もあれば、完治する」

「ははは、その意気」

「いや。経験上そうなんだ」

炎が大真面目に言うので、さすがにみどりも笑いを引っこめた。

「ちよくちよく来るよ。お大事にね」

そう言つて席を外そうとすると、患者は物騒な物を押しつけてきた。

「ここを出るまで、預かっていてくれ」

血のりのへばりついた日本刀だった。みどりは、帰つたらまずこれを磨きあげようと決心した。

「それじゃ」

「ああ」

病室を出たみどりは、両手を胸にあて、ふうと一息ついた。そうして、ぽかんと窓の外をながめやった。

今の気分は一言に表現しがたかった。

日向 炎は、宣言どおりきつかり十日で退院した。

すっかり病院内のアイドルと化していた炎は、両腕にこぼれ落ちるほどの花束をかかえ（花束には送り主の名前と連絡先が書かれたカードが入っていた）、スキヤンダルを抱える芸能人がマスコミをかいくぐるように、そそくさと白いハーレムを後にした。

青い梢のざわめく下り坂を、きしきしと音をたてて自転車は進む。

みどりの白いワンピースをがっしりとつかみ、そのまま石像と化した背中の乗客は、あっというまに追いこしていく大型トラックの後姿を唾然として見ている。

「野蛮だ」

平安人の感想は、この一言につきた。

「そしてこの乗り物は、実に乗り心地がよくない。庶民には馬を飼う金がないのか」

「文句があるなら降りて走れば」みどりはさらりと言った。

みどりの計らいで炎の見た目はかなり現代化されていた。舜の体型とほとんど変わらない炎は、舜のごひいき「vivienne westwood」の白いシャツに、またまた舜のごひいき「true religion」のジーンズを合わせ、格好よくキマっていた。舜は妙に疑りぶかいところがあるため、みどりは幼馴染みの特権を笠に着、彼の母親に頼んで内緒で借りてきたのだ。しかし、着せられた当人はいささか着心地が悪そうだった。

自転車を鞍馬駅の駐輪所にとめ、客人を荷台から降ろしてやる。

狭い駅内にはばらばらと人影があった。切符を手渡すと、炎は興味深そうに自動改札機に通した。

四条駅まではまめに乗換えを経た。十日目にしてようやくまともに見る未来世界に、炎は気後れするというよりも、むしろ珍しくて楽しくてならないようで、地上へ続く階段を上りながら、みどりは地下鉄がどうやって地面の下を走っているかを延々と話さなければならなかった。

外は真夏日だった。京都の夏は特に暑い。スコールに似た夕立ちもたびたび降る。二人は鴨川に沿って桜並木を歩いた。春には、満開の桜がまつすぐな遊歩道をどこまでも彩る。

「変わらないのは川の流れだけだな」炎の表情がゆるんだ。「大層な橋もかかっているし」

四条大橋は観光客、地元人を問わず人通りが絶えない。京都一番の繁華街にあつて、南東に見える重厚な大屋根は、出雲の阿国に起

源をもつ日本最古の歌舞伎劇場「南座」である。川では靴のままの子供たちが、水を蹴りあげながら楽しそうにはしゃいでいた。傘をかぶった釣り人の姿もある。

「炎はこの辺りの生まれなの？」

「生まれは鞍馬だが、六波羅に二年近く住んでいた」

六波羅は、北は建仁寺より南は五条通りまで、西は鴨川より東は東大路にいたる地域をいう。祇園の南に位置し、平家全盛のころは一門の大邸宅がひしめき、鎌倉時代には六波羅探題がおかれ、今でこそ清水寺の人気の陰にひっそりとたたずむ町だが、言うまでもなく、歴史の表舞台に踊った場所のひとつである。

みどりはぼんやりと日本史の知識を反芻していたが、道を折れ祇園に入ると、どうしても人目を気にしなければならなかった。顔なじみの舞妓と鉢合わせになる可能性は十分にあった。

この世界では、中学卒業と同時に、「仕込みさん」として舞妓になるための修行をはじめめる娘が多い。まず「置屋」という養成所のような所で、経営者の「おかあさん」に指導をもらう。みどりも最初の一年を置屋で過ごし、花街のしきたりや行儀作法を一年かけて学んだ。今年になって一ヶ月の見習い期間を経、置屋に表札を出してもらうと、いよいよ花の舞妓生活が幕をあけたのである。母が女将というのもあって、初めに勤める店は「はなを」に決まった。

「はなを」のたつ白川通りは、昔ながらの木造の家並みながらび、道路は石畳がしかれ、北側に柳、南側に桜や梅などが植えてある。すぐ脇を流れている白川は細い川で、大きな錦鯉が泳ぐ。このあたりの町屋は、ほとんどがお茶屋、置屋、料理屋などの商家で、白川にかかる新橋周辺は祇園で最も情緒のある場所だといえる。

もっともみどりの家がお茶屋でなければ、炎を滞在させることもなかった。お茶屋は舞妓芸妓の生活の場であり、女人だけの領域と決まっている。炎のこころはくの身の振りかたについてみどりなりに考えた結果が、ここへ連れてくることだった。正直うまくいかどうかは怪しかったが、失敗したら失敗したでその時考えようと

思っていた。

“ 割烹 音無 ”

のれんの前に立ち、みどりは深呼吸した。炎はなにか良からぬ予感でもしたのか、みどりの表情を伏し目がちに注視している。

「御免下さい」

紅殻格子を開くと、石畳の短い通路の奥、白木造りのカウンター席に、音無の美人女将であり、舜の母親でもある女性の、しゃんと伸びた背中が目についた。

「あら。みどりちゃんじゃないの」花の咲いたような声だった。すらつと長身で、濃い抹茶色の和装にすつきりとした結髪がとても清楚だ。切れ長の目元に薄紅色のアイシャドウが美しい。端正な顔立ちで、つくづく息子によく似ている。

「忙しい時にすみません」

「大丈夫よ。御予約のお客さんはお昼なの。舜を呼ぶ？」

「いえ、女将さんをお願いがあつて来たんです」

女将は意外そうな顔をした。

「一体何かしら」

「従業員を募集していましたよね」

「そうね。六月に、長年勤めてくれたマツさんが辞めてしまったから。ご主人が入院されたのよ。物腰やわらかで、とっても真面目なひとだったんだけど」

みどりは力をこめて言った。

「もしまだ募集しているなら、紹介したい人がいるんです」

「みどりちゃんのお友達？」

「まあ、どちらかというと」

女将は少し困ったように首をかしげた。

「歳はいくつなの」

「十七です」

「うちは老舗の割烹料理屋だから、お得意様が多いの。接待やお作法もお仕事のうちだから、舞妓経験のあるみどりちゃんならとも

かく、世間一般の高校生になると荷が重いかもしれないわ」

「その点は心配ないと思います」

「会ってみないことには、なんとも言えないわね」

「実は、一緒にそこまで来ているんですけど」

女将は目をまるくした。

「もしご都合が悪くなかったら、会っていただけませんか？」  
みどりはためらいがちに尋ねた。

「ええ、ええ。わかったわ。舜！お茶を二つ淹れて頂戴」

途端にみどりの心臓はでんぐりがえった。舜に出てこられるのは、いろいろとまずい。お互いの親にも恋人にも話さないようなことを包み隠さず打ち明けてきた間柄だから、話すとしたら舜しかないし、話したいとも思ったが、うまい言葉が思い浮かばず、あまいな言い逃れをしていたので、みどりのことを深刻に心配していた舜の機嫌は、目に見えて悪かった。

戸口に戻ると、炎がつかみかかってきた。どうやら中の会話がもれていたらしい。

「そんな話、初めて聞いたぞ！」

「しーっ」

強引に炎の口をふさいで、みどりは諭すように囁いた。

「いい？あなたは私に膨大な借金があるの。病院の入院費、電車

賃、慰謝料・・・」

「慰謝料だと」

「まあね」

「ふざけるな！勝手に助けておいて」

「勝手にですって」みどりはカチンときた。

「私が助けてなかったら、今ここに立ってるあなたはいないのよ！暗闇の山奥から重傷のあなたを背負って、どんな思いだったと思う！おかげで親にも親友にも怒られて、踏んだり蹴ったりよ！」

「悪かった」炎が呆気なく引いたので、みどりは急ブレーキに耐えきれず前のめりに転倒した気分させられた。

「お前には多大な恩がある。望むようにするよ」  
諦めたような口ぶりだった。

一方、カウンターに座った緋髪の少年を、厨房から簾越しにのぞき、舜には二つの解せない点があった。一つは、どうしてみどりから自分に一言なかったのかということ。もう一つは、失くしたと思っていたお気に入りシャツとパンツを、どうしてこの見知らぬ男が着用しているかということである。しかも自分よりよく似合っているのは自覚する。

「ヒューガー・エド・エンさん。日本国籍は六年前に取得」

女将はみどりの偽造した履歴書にむらなく目を通したあと、目の前にしつとり座っている見慣れない容姿の少年に、輝く好奇心の目をむけた。

「ロシアのヤマル半島出身で、モーリタニア国籍の父と、アルゼンチン国籍の母のハーフです」みどりがわざわざ付け加えた。

「宜しくお願い致します」ヒューガー・エド・エンは深々と頭を下げた。

「どうしてここで働こうと思ったのかしら」

「日本古来の文化が地にも人にも息づいている祇園に、かねてから興味を抱いていました」

「嬉しいことだわ」女将はにっこりした。

「いま自由な時間があるうちに、現地に足を踏み入れて、最終的には論文にまとめる方針です」

シナリオが用意されていたような巧みな言いまわしには、みどりも内心舌を巻くばかりであった。

「ヒューガーさん、あなたの熱意はわかったわ。ただね、やっぱりまだお若いということとで接待に不安もあるの。うちのお客さんは年配の良識人が多いから。だからこういうのはどうかしら。二週間ほど試用期間を設けて、もちろんお給料は出すわ。それで支障がないと判断したら、正式にアルバイトとして採用する。あなたも、も

し向いてないと思ったたら二週間で辞められる」

「結構です」

「交渉成立ね」

手渡された契約書をちらりと見、みどりは心中でガッツポーズを作った。

とはいえ本心は、炎からお金を巻きあげる気などさらさらなく、いわば口実だった。ただ彼をこの時代に引きとめられれば、それでいいと思っていた。そうしなければ、彼はすぐさま元の時代に戻るだろうと思った。そして今度こそ死ぬのだろうという予感がした。

## 第2章 はじまり(2)

2

燃えたつような不気味な夕闇のなか、日向 炎は馬を走らせていた。

前方にそびえ立つ鞍馬山は大量の黒煙を噴きあげ、咆哮しているかに見えた。都から消火活動の民衆が長蛇の列をなしている横を、疾風のごとくかけぬけていく。

胸騒ぎがする。本家の者たちは皆無事に山を下りただろうか。この速度では屋敷が灰塵と化すまでに到底間に合うまい。しかし何とかしても間に合わせなければ。隼の速さが欲しい

その渾身の想いが頂点に達したとき不思議な現象が起きた。足元に風が生まれ身体がふわりと馬を離れた。その瞬間、炎を乗せた風は一気に音速に達し、一直線に鞍馬山を目指した。

凄まじい山火事である。熱風が暴れ、火気を帯びた灰が踊り飛び、頬をかすめるたびチリチリと音をたてた。炎は唇に二本指をあて短い呪文を口走った。神通力で結界を張ったのだ。軽く跳びあがり、上空から火炎の中心に突入した。

三百年に及ぶ歴史を誇る日向本家の巨大な屋敷が、もはや間取りも判別できないまでに崩落していた。一面の火の壁が視界を遮断する。

「誰かいるか！」

返事はない。

炎は、よろめきよろめき灼熱の海を徘徊してまわる。突然何かに足をとられ、がくと体勢を崩した。見るとかつて屋敷の中心に鎮座していた大黒柱の残骸だった。

「ここは大広間だ……」

その時、炎の心臓はドクンと高鳴った。微かな弱々しい、だが確

かに、そしてそれは最も聞きたくなかった声だった。

「炎……」

全身を戦慄がかけぬけ、全ての思考が停止した。火の海からどろりと焼けただれた細い腕がのぞき、小刻みに震えながら必死に何かを訴えている。炎は生気を失い、その場に膝から崩れおちた。母親が柱の下敷きになって燃えている。手足はあらゆる方向に折れ曲がり、下半身の半分は断絶しているのに、不思議に顔だけは綺麗に残っており、柔らかな春の日差しのように微笑んでいるのは異常な光景だった。

「母……上、これは誰にやられたのですか！」炎は力を込めて母の手を握りしめた。

「逃げるのです……」充血した唇がそう言った。

「これは父上の罠……あなたを……殺すつもりです……いいですか……良く聞きなさい」

「母上！これ以上話してはいけません！」

「あなたの本当の母親は……私じゃ……ない……」

後頭部を叩きつけられたような衝撃を覚えた。

「あなたは……魔界の頂点に君臨する魔神・龍毅と……閩呈様の間にできた子供なのです……閩呈様はあなたが生まれた時……あなたの血に宿る魔力を固く封印しました……。しかしその封印は……あなた自身によつて解かれてしまった……」

瞳に絶望の色を隠しきれない息子を見あげて、母は金色に輝く涙を流し、持てる最後の力を振り絞ると、その手の中に碧い宝石を握らせた。

「遠い時空の彼方へ隠れるのも自由……本当の母を訪ねるのも自由……とにかく逃げなさい……できるだけ遠くへ。今のあなたでは……閩呈様に勝てない……」

炎は凍りついたように動けなかった。この世で一番愛した人が、生命のわずかな残り火をいま静かに絶やそうとしているという現実だけが、絶対的なものとして迫ってきた。

「決して一人だと思っではいけませんよ、炎…。世界は個人が想像も及ばないほど広大で…あらゆる出会いに満ちています…」

「そんな…」

「炎。愛しています」

「……母上？」

「……」

「母上」

「……」

「母上 ……！！」

暗く冷たい水の中で、誰かの声がする。このまま永遠に闇に沈んでいた。俺は生きることになった。頼むから俺を呼び起こさないでくれ。

いや、駄目だ…

俺には生きる目的がある。俺は生きて、生きてこそ

目のまえの輪郭は薄くかすんでいき、記憶の深層の泉に波紋が生じた。

蝉の声が断続的に聞こえている。見知らぬ部屋の光景。状況を把握するのにわずかな時間を要した。炎は寢床を起きあがると、窓辺の簾にそつと手をかけた。空は東から白んで外気は澄みわたり、数羽の雀が軒をはねていた。眼下には細い川が流れ、渡ったむこうに枝垂れ柳が揺れており、川に沿って人気のない通りが閑散と横たわっている。

思い起こせばここに居室をさだめて三日になるのだ。数日前まで死闘のさなかにいた自分が、にわかに安穏な未来で暮らしている現

実は、依然として受け入れがたかった。

炎は窓辺にもたれかかり、もう何度見ただろうあの夢をぼんやりと反芻していたが、無性に頭から水をかぶりたい心境になって、寝間着のまま下の階へ降りていった。

薄暗い厨房からは明かりが漏れていた。小気味よい包丁の音につられ、通りぎわに一瞥すると、見覚えのある少年の後ろ姿が見えた。炎は彼について、この女将の息子でみどりの幼なじみだという説明しかされていなかったが、勤めはじめて丸三日、まだ一度も会話はなかった。

炎の勤務態度はいたって真面目だったが、少なくとも彼の信用が自分にならないことを、炎は暗黙のうちに感じとっていた。しかし炎も淡泊な性格であるから特に意に介すことはなかった。だから、しばらくの間舜に視線を固定していたのも、何気ない気まぐれと、今日が店の定休日にあたる月曜だという疑問からだった。

視線に気づいてか舜が振り返ったとき、双方とも視線を交えているのに変な空白があった。

この二人、姿顔立ちこそ別人だが、かもしだす雰囲気がよく似ていた。

「こんな早くに何をしてるんだ」

奇妙にも、二人は同時に同じ言葉を発していた。

「俺は…徹夜で新メニューの開発だけだ」

「俺は…目が覚めてしまつて顔を洗いに」

柄にもなくおどおどして二人は目語した。

打ち解けるきっかけとは解らないもので、舜は喉にひっかかった魚の小骨が抜けたような顔をした。

「そういえば挨拶がまだだったな。俺は渡瀬 舜。ここの料理長を目指して修業中だ。シユンでいいよ」

「日…ヒューガー・エド・エン」

炎はお国柄、片仮名を発音しにくい様子である。だが外国人になりすました今となつては好都合かもしれない。

「エンと呼んでくれ」

「タンザニアとコロンビアのハーフだっけ」

「よくわからん」

「面白いやつ」舜はふきだした。「そうそう、みどりから伝言預かつたんだ」

「何と？」

「今日の夜、予定空けとけってさ」

空ける間でもなく予定はがら空きだった。

「お前、みどりと付き合ってるのか」

「半月程」

「知らなかった」

舜は何故かショックを受けているように見えたが、そもそも二人の解す「付き合う」という単語の意味には恋愛関係と知人関係の隔たりがあった。

「まあ、楽しんでこいよ」

「何かあるのか？」

「今夜は鴨川の花火大会だろう」

花火とは何なのか気になったが、炎はみずからぼろを出す言動は一切しなかった。

この三日間、千年後の未来人を相手どった炎の立ちまわりは鋭敏を極めた。仕事の内容は客との会話が中心だったから、政治の話題は出るわ海外状勢の話題は出るわで、もちろん炎には何のことやらさっぱり理解不能だが、客が口にした単語を一言一句逃さずすべて記憶し、うまく文章を組み直して、なるべく相手に同調した形で口を合わせたり、それが困難な局面では、相手が食いつく別の話題を用意し、気分を害さないよう巧みに話を逸らしていく。まったく舞妓のみどり顔負けの芸当は、この類まれなる頭脳をもってこそ成しえた。

音無では基本的に女性が接客を担っていたので、女将にとって心配の種だった炎の性別だが、こちらもあり問題ないようだった。

炎の生まれついで麗容と、さざ波を彷彿とさせる上質な身のこなしには、客もみな一目置いたのであった。

始めは気が乗らなかつたが、このころはこの生活にも楽しみを見出していた炎だった。振り返ればこれまでの人生、日向という一本のレールに固執を余儀なくされ、考え方も狭くなっていたように思う。自分の意思で実行した時渡りではなかつたが、千年後の未来がこんなにも平和な様子を見ると、どこか卓越した見方にさせられるのだった。

舜のふるまってくれた創作料理がなんとも個性的で、思わず苦笑した炎であつた。

新橋のたもにかがみこみ、川底を悠々と泳ぎまわる錦鯉に目を凝らしていたみどりは、下駄のからんころんと鳴る音を聞くと、ぱつと笑顔を見せた。

こちらへ歩いてくる浴衣姿の少年は、透き通るような緋髪をそよ風になびかせ、襟元を整えながら、心なしか満足そうである。浴衣は濃茶色に細い風紋をあしらったシンプルなデザインで、舜のものを借りたと推察して、二人は割と仲良くやっているのだらうと思われた。

「やっぱり炎には和装が似合うね」みどりは感嘆の声をあげた。

「シユンが着ていけと」

「店では和装なんでしょ？」

「ありがたいことにな」

みどりは可笑しくてくすくす笑つた。ズボンが股にすれて窮屈だと言つて腰ばきしていた姿が目につかぶ。

「みどりもよく似合う」

みどりの浴衣には、藤色に大柄の菖蒲が描かれていた。炎が形のよい口元をゆるめたとき、みどりはある種の緊張をおぼえた。考えしてみると、つい半月前の彼からは、このような穏やかな笑顔を想像

することもできなかつた。一瞬、彼の微笑みに墮ちていく女性が何人いたのだろうと、不謹慎なことを考えた自分がいた。

「そのはなびとか言うのは何なんだ」

「読んで字の如しよ。見てのお楽しみ」

西の山稜にわずかな輝きを残し、空は光の透らない海底へと沈んでゆく。鴨川は兩岸をぼんやりと暖色に縁取られ、幻想的な夜景を演出している。

どこまで歩いても人込みの絶えないのを見て、炎は驚愕した。

「国中総出で見に来ている。はなびとはそんなに偉大なのか…？」

「あつ。あんず飴」

屋台の列の中にみどりの後姿が消えた。

みどりがあんず飴を購入している間、流れる人間プールの中で炎は身の置き場に困っていた。みどりは嬉しそうに戻ってきた。

「三つくれた。炎、二つ食べなよ」

「それよりここを移動しないか」

「そう言われても」

炎は長らく躊躇したが、段々と顔が青ざめはじめ、瞳孔が肥大していき、震えはじめた。

何かが切れたようにみどりの手首をつかむと、

「見なかつたことにしてくれ」

言うが早いか、とんと地面を蹴って宙に踊り、とん、とん、とまるでそこに階段があるかのように空中を昇って行って、商店街の屋根の上へみどり共々ふわりと降りたつた。

その途端、炎は屋根瓦にどつと崩れると、呼吸困難が解消したように肩で息をした。

啞然としたのはみどりだった。たった今何が起きてどうしてここにいるのか、狐にでもつままれたようである。

「駄目なんだ」

ようやく脈が落ち着いた炎は、苦々しく言った。

「閉所恐怖症なんだ」

「そういう問題じゃなくて・・・」  
その時だった。

ドン！

音の大砲が心臓を射ぬき、夜空に大輪の花を咲かすと、せきを切らしたように次々と花火が上がりはじめた。連続する爆音が骨の芯までびりびりと伝い、絶えることなく星屑がばらまかれては降り注ぐ。二人は瞬きさえ忘れ、その光景に魅了された。赤、黄、緑、青、白。百合、朝顔、紫陽花、枝垂れ桜。それは盛大な空の宴だった。

「…綺麗だ。とても…」

ようやくこぼれた炎の呟きは、深い響きを含んでいた。

炎は17年の生涯で、これほどの感銘を知らなかった。そして改めて実感する。自分は千年の時を越えこの時代に流れついたということ。

無意識に懐に忍ばせた青い宝石を握りしめていた。烈烈な母の最期がよみがえる。時空石。この石がどういったルートで母の手に渡ったのか、もはや知る術もない。ただ、決してこの世に歓迎される存在ではないと思う。持ち主が使いかたを誤れば…末恐ろしい。どんなに時を巻き戻したい衝動にかられても、決して私欲の為に過去を変えてはいけない。母はそうかたく諭して死んでいった。

「私、花火が好きよ」みどりは懐かしむように目を細めた。

「ここにいてる何百、何千の人達と、同じ空を見てるこの瞬間だけは通じてる気持ちになれるの。花火が終われば、皆それぞれの生活に帰っていくんだわ」

炎はみどりの瞳に宿った光をじっと見ていた。この娘は平和な世界で愛をたくさん受けながら育つたのだと、そう思った。

その時、炎の頭の中でなにか歯車の外れたような音が鳴った。

職業柄こういうことは幾度もあったので、反射的に炎は「それ」を探していた。闇を切り裂く大花火が炸裂したまさに上方だった。

炎の「天眼」はしっかりとその姿を捉らえていた。

「みどり、ここにいてくれ」炎は視線を固定したまま口早に言った。

しかし、同じタイミングでみどりが悲鳴をあげたのだ。

「どうした」

「あれ…」怯えながら空の一点を指さす。

「お前、見えるのか！」

「み、見えるけど、あんな生き物見たことない」

「妖怪だ」

みどりは今にも失神しそうな顔で炎を見あげた。「これは夢だわ」

「こつちに向かってくる」

炎は下駄をぬぐなり隣の高い屋根へ跳び移った。下界にざっと目を走らせる。特に変わった様子はない。誰にも見えていないのだ。

硬直したみどりの眼が問いかけていた。この少女に対して多少の信頼感は芽生えつつあった。

「俺は陰陽師。少なくとも人間だが…」言葉を切った。

「それだけじゃない」

馬鹿みたいに口を半開きにしたみどりを残し、たやすい動作で屋根伝いに移動していくと、比較的高い電柱を足場にしてぱっと空に舞いあがった。一躍で軽く50メートルを超している。引き合うように黒い塊が直滑降してきた。巨大な蜘蛛 みどりにはそう見えたで、背に身体の二倍近い大きさの羽根が生えている。びっしりと胴体を覆った長い体毛は人間の毛髪を思わせた。額の黄色い一つ眼が発光した時、攻撃が発動されるのがわかった。

「急急如律令」

短い印。炎の手の中から極太の光の矢が発射され、空を疾走する。それが温度二千度にも及ぶ灼熱の光だと認識できたのは、まともに喰らった妖怪のみであるが、果たして認識する暇があったかは疑問だ。全長二十メートルの標的は、一瞬にして灰塵へと帰した。

着地して、炎は少し体勢を崩した。やはり普段のように上手くは

いかないらしい。ふさがったはずの古傷が鈍い痛みと熱をもっていた。撃破しての手応えがあまり薄かったので、炎は内心首を傾げる。あんな弱小妖怪が群れも作らず何をしに来たのだろう。

間もなくして、みどりは空中をひらひら降りてくる紙切れに目をとめた。思わずキャッチしたが、焼けるような熱さにたまらず手を離してしまった。紙切れは二人の足元に落ち、瓦の表面にじゅつと焼印のようなものを残すと散り散りになった。複雑な文字が絡まるように連なり、羅針盤のごとく円を描いている。

「日向の呪札だ」

炎の目つきがみるまに鋭くなる。

「何て書いてあるの」

「血判といって、妖怪を操作した呪術師の名が書いてある」  
みどりはもう言葉も喉を通らない。

「日向閨呈」炎は押し殺すように言った。「父の名だ」

翌朝、みどりは熱をだした。幸いお茶屋に指名客が来る連絡はなかったが、体力勝負の舞妓にとって夏風邪などご法度だから、先輩舞妓でもある母は口調を強くしてみどりを戒めた。「馬鹿は風邪をひかない」をキャッチフレーズにしているだけに、覚えているかぎり中学一年以来の発熱である。

母が出ていってしまったと、部屋の中はしんと静まりかえった。みどりは枕に頬を押しあてて黙考していた。昨夜の出来事のと、炎は殻にこもったように悶々とし、慎重に選んだ言葉も会話につながることはなかった。しかし、日向 炎という巨大な謎が次第に輪郭を持ちはじめたように思えた。的中率に定評があるみどりの勘が正しければ、炎に致命傷を与え、この時代に追いやっただろう人物は、彼の父で日向閨呈なる男であり、千年の時を越えてなお命を狙って追っ手をさしむけたのだ。

不意に玄関の呼び鈴が鳴り、弾かれたように布団を跳ねとばした

みどりには、すでに何か予感するものがあつた。廊下を弾丸のようにかけぬけ、格子戸を威勢よく開け放つ。しかしそこに現れたのは期待した人物ではなく、言うならば思いつくかぎり最も平凡な客だつた。腰に似合わないエプロンを巻いているのを見ると、彼がエースを務める部活動は休みらしい。気付いてか、厨房のスリッパを履いたままである。慌てて飛びだしてきた様子が想像できた。

みどりを見るなり、舜は叫んだ。

「エンが失踪した」

聞けば、今朝方、諸用あつて炎の泊まる従業員部屋に失礼したところ、寝具衣類とも整然と片され、極めつけに置き手紙が残されていたという。みどりは間髪入れず舜の手中の紙をひったくり、ざつと目を通した。達筆すぎる堂々とした行書体で、世話になつた礼が書かれていると思われるが、言葉遣いが古風で部分的にうまく解読できない。

みどりははつとして寝室に駆けもどり、鍵をかけておいたクローゼットを開き、何枚にもかぶせた洋服の山を崩した。あつた！預かつていた日本刀である。これを置いていくほど、事は迅速を要したのだろうか。

「どうしたんだよ！」

舜の怒鳴り声は、水の中で聞いているようにぼやけていた。みどりの目の前を生死の二文字がちらついた。確信のようなものが迫っていた。このままでは炎が死んでしまう。助けなくては！・・・自分でも不思議なほど、どうにもならない衝動があつた。

残された刀を腕の中に抱きしめ、みどりは強く念じた。

「それ」が現実になるとは、思いもせず

その感覚は突如として襲ってきた。五臓六腑がぼつと燃えあがり、周りの気圧が急速に変わったのを認識した瞬間、みどりは逆走する超速ジェットコースターに乗っていた。三半器官が悲鳴をあげ、凄

まじい力で背後に吸引されていく。三六〇度、世界が白み、次いで真っ青に変わっていったが、それを見る間もなくみどりは気を失っていた。

### 第3章 虚無に生きし男(1)

#### 第3章 “虚無に生きし男”

1

時は平安末期。桓武天皇の系譜をくむ平氏は、桓武平氏、坂東平氏、伊勢平氏の分流にわかれ、伊賀・伊勢を地盤とする伊勢平氏の傍流から出たのが、「平家」と称される一族である。祖父・平正盛は出雲で反乱をおこした源義親を討ちとって名をあげ、父・平忠盛は瀬戸内海の海賊を平定するなどして、当時院政をおこなっていた鳥羽上皇の信任は厚く、武士だけでなく院近臣としても重宝された。この勢力を、飛ぶ鳥を落とす勢いで一気に飛躍させたのが、平清盛であった。

保元の乱と平治の乱の勝利により後白河法皇の信任のもと勢力を伸ばし、武士として初めて、左大臣や右大臣を経ずして異例の従一位、太政大臣に昇りつめた平清盛は、長女徳子を高倉天皇の中宮として入内させ、嫡子重盛は右大臣兼左大将、次男宗盛は中納言兼右大将、三男知盛は三位中将、嫡孫維盛は四位少将となり、総じて一門から公卿が16人、殿上人が30余人、諸国の受領、衛府、諸司の長官が60余人も世に出たことになる。六波羅の大邸宅はきらびやかな着衣の人々であふれ、門前には車や馬が列をなし、豪華絢爛というばかりの賑わいを見せていた。

平家にあらずんば人にあらず

後世に語り継がれる有名な文句があるが、一門の繁栄の陰には凄然たる戦乱と、知略思惑の鷹の目の鋭さがあつたことは否めない。政敵を蹴散らし、天皇を引きずりおろし、その栄華を勝ちとつた代償ははかり知れなかつた。

・・・西暦1078年、晩秋。

風が唸る宵だった。

六波羅の清盛邸「泉殿」はにわかには騒然となっていた。中宮徳子が産気づき、院の後白河法皇をはじめ、関白基房を筆頭とする多くの公卿・殿上人が集まっていた。徳子が産所に入ってからすでに五時間が経過していたが、加持祈祷が続けられる傍で、徳子の容態は悪くなるばかりで、母子ともに危険な状態にあった。

「天よ・・・天よ・・・天よ・・・！」

太い両腕をむっすとな前に組み、産所前の廊下をせわしく歩き回っていた父親は、妻の蒼白な顔を見つけると一目散に駆けよった。

「時子！子は！子はいかなる様子だ！」

「に、入道さま。落ち着いてください」

このころ度重なる病気のため清盛は出家し、浄海入道を名乗っていた。それにしても入道相国の威厳はどこへやら、妻にしがみつくその有様は、戦の先陣をきって敵をばさばさとなぎ倒す平家の棟梁には、遠く及ばない男の姿であった。

男の妻・時子の態度は、少なくとも亭主よりは平静さを保っていた。

「心配はご無用です」

「しかし、鬼界ヶ島の怨霊がとり憑いておると聞いたぞ」

鹿ヶ谷の陰謀とは、昨年六月、後白河法皇が鹿ヶ谷山荘へおもむいた際に、院近臣の藤原成親、西光法師を中心に、法勝寺執行の俊寛、検非違使の平康頼、その他藤原成経、源成雅、中原基兼、惟宗信房らと平家打倒の陰謀を企てたのが明るみに出、清盛が中心的関係者を九州の離島「鬼界ヶ島」へ流罪にしたもので、それでも徳子の懐妊にあやかり、罪人の大部分が恩赦にされていた。

「身体の弱っているのにつけこみおって　忌まわしき物の怪めが！」

「閨呈さまがお傍にいてくださります」時子はなだめるように言

った。

「全幅の信頼を置いているのでしよう」

「もちろんだ。確かに。しかし」

清盛のあてもない不安は、もはや何を言っても堂々巡りだった。

と、そのとき、たちこめていた不穏な空気が一瞬にして散り、威勢のよい元気な産声が天の祝福をつげた。

「おめでとうございます！皇子です！」

産所がどつと湧くと、我先にと突入を敢行した夫婦ふたりが目にしたものは、歡喜の渦のなか、衰弱しつつも母親顔で微笑みかける美貌の愛娘と、天使の可愛らしさをもった玉のような赤子だった。

清盛は感極まって豪快に泣きはじめ、娘の手をとって何度も何度も強くうなずいた。

「徳子、でかしたぞ！未来の天皇の誕生だ！」

産んだ本人より興奮し、天下の平清盛が真つ赤に泣きはらした顔をさらすと、同室していた女官中が大笑いにするにいたった。

号泣する主君の脇を、長身の男が滑るよつに通り過ぎていった。

さらりと揺らぐ長い髪は三十三という若さに不似合いな完全な灰色で、表情には月光の美しさがあつた。平家一門専属の陰陽師、日向閨呈 ヒユウガ ギョクテイ である。陰陽道の双璧たる賀茂・安部に匹敵する第三勢力として世に名高い、日向一族・宗家の出身であり、次期当主が確定していたなか自らの鞍馬邸宅を焼き討ちにし、一族から忽然と姿を消した男であるが、彼の主君清盛はその事実を知らない。

わずかな疲労の色をうかべながら、次第に遠ざかる歓声に耳をすまし、屋敷の門前を流れる漆黒の川辺までやってくると、周囲に人のいないのを軽く確かめ、閨呈はしなやかな動作で宙に印を描きはじめた。閨呈の筆跡はゆらぎながら青白く発光し、ひとつの巨大な陣にまとまると、目の眩む光が四方に放たれ、陣の中に銀色の重力場が発生した。

「導光神来迎」

無味乾燥な声で唱えると、閨呈が背を向ける泉殿の上空から、鬼の形相をした大量の魂が群れをなし、おぞましい断末魔の咆哮とともに、彗星のごとく次々と陣の中に飛び込んでいく。巨大な陣は耐えきれずにがたがたと震えた。中でも体格のある魂のひとつが、吸い込まれざま、閨呈にむけて報復の黒い火炎を吐きつけた。その数秒後、膨大な魂を食い尽くした輝くブラックホールは、満足したように収縮していつて溶けるように消滅した。

「ふん・・・」

左頬に焼きついた怨霊の置きみやげをさすりながら、閨呈の瞳に殺伐とした光がちらついて消えた。現しうる感情の色彩が極端に少ない白皙冷眼の男は、いましがた自分に小さな抵抗を加えた魂の元所有者を、記憶のあちこちから探りだしていた。

「崇徳上皇か」

鳥羽上皇の子として寵愛を受け、わずか四歳にして天皇となったが、保元の乱で後白河派との武力衝突に敗れ、讃岐の国に配流となった人である。十四年前、二条天皇の命で暗殺されたという噂は閨呈の耳にも入っていたが、自らの舌を噛み切った血で大乘経を書き、「この写経の功力を三悪道に投げこみ、その力をもって日本国の大魔縁とならん」と呪詛を残したことから、鹿ヶ谷のあとは閨呈の進言で上皇に崇徳院の院号が贈られ、怨霊慰撫がとりなされていたのだった。

主砲はこいつかと理解すると、閨呈の無表情な顔が軽蔑にほころんだ。死んでもなお現世の柵にしがみつこうとする人間の粘着質な悪臭は、そういう要素を持ちあわせていないこの陰陽師にとって、非常に興味深く、また嘲弄の対象でもあるのだった。

「この世は、クスだ」

男の歳がまだ十にも満たないうち、その定理がすでに心に根ざし

ていたのは、幼い心理的な自傷癖からではなく、世に稀にみる鋭利な頭脳と、日向という土壌にはぐくまれた「天眼」と、この世に生をうける以前から彼の魂に刻まれていた、心髄とも呼ぶべきもの。それら三つが一同に会した結果であった。ちなみに「天眼」とは、かぎられた血筋のもとにしか出現しない、神通力により常人には見えないものを見通す能力のことである。初代・永翠を起源とする日向の血族は、能力の度合に差はあるものの、皆総じてこの天眼を身につけているのであった。

日向閨呈は、彼が無邪気な産声をあげた時点で、ある程度の運命を約束されていた。陰陽道の大家、日向の嫡子として生をうけると、まだ歩行に両腕の自由がきかないうちから、陰陽師たるもののすべてを叩きこまれて育った。「初代日向永翠の再来」とまで讃えられた閨呈の資質であったから、一族の誰もが彼を羨望しつつ特別に扱っていたし、近い将来、宿敵賀茂・安部家をも容易くしのぎ、日向の勃興は疑う余地もなかった。

当時から欲に淡白で、つねに一歩隔てたところから物事を傍観していた陰陽界の新星は、周囲の熱い視線にもまったく無頓着だった。父親はそんな閨呈のことを「大成する器の持ち主」と評し、盲目なまでに溺愛した。檻につながれた自分を客観視して、ある日閨呈はふと首を傾げた。そのきっかけはとても些細なものだった。気まぐれで数日間飼っていた猫が死んだのだ。八歳の閨呈はぼんやりと猫の昇天する様子をながめていた。猫は楽々と成仏したようで、閨呈が五つの時に教わった浄霊の経も出番はなかった。そうして猫の魂が空の向こうへ消えたとき、地上に残されたひとりの少年の脳裏を、突然「永遠」の二文字が怠惰の感情とともによぎった。彼自身、陰陽師の職務において、すでに何人もの地縛霊を天上へ送還してきたが、その意味にあらためて考えをめぐらすと、自分のしてきたこととは、「魂の循環」の絶対的な鉄則にのっとり、俗語されるところの輪廻転生を円滑に進める手助けに相違なかった。

永遠とつづく輪廻。  
繰り返される歴史。

「腐っている」

その思いは歲月とともに強くなっていった。

父親自身の名誉欲を満たすがために注がれた屈折した愛。周りの親族は「初代様の雪辱をいま晴らさん」といきりたつ割に、自らは何もしない。相手にしてきた怨霊は、みな醜い執着にとらわれ現世にしがみついている。

彼の魂を揺さぶるようなものは、少なくともこの世にはなかった。平家一門の専属陰陽師としての地位が確定したのは、そんな折である。

西暦1158年、閏呈十三歳、平清盛四十歳のことである。

これまで政界にのさばっていた王朝貴族というのは、保守的で変化を嫌い、運命や吉凶にやたら熱心で、大半が固定観念を愛してやまない慎重派だった。894年に遣唐使が廃止されて以来、国はほとんど鎖国状態になってしまい、貴族たちは細々しい権力争いにいそしみ、のんびりと娯楽を楽しんでばかりいた。そんな万年風邪にかかった政界に、淡い幻も吹き飛ばすような朔風を送りこんだのが、平家の棟梁平清盛である。

清盛は、決して武力だけで天下の覇者にのし上がったのではない。まず、政治家になくはならない処世術に長けていた。対立する天皇親政と院政の間を巧みにおよいでわたり、朝廷の血統常識をくつがえす大出世を成しとげた。次に、時代の先見性があり、合理的な発想をできたことがある。朝廷がつまらない意地をはっているなか、勝手にさっさと「対等な」日宋貿易を推しすすめ、金銭面での大きな利益と、停滞していた国内に新文化をもたらすことに成功した。六波羅の門前では、いつも珍しい品物の数々が取引され、その華や

ぎよは朝廷の内裏をも優に勝った。最後に決め手となったのは、平清盛という男の、人間的な魅力である。人間には生まれつき「リーダー気質」と呼ばれる種類がいて、その言葉、行為が与える影響と、何より「オーラ」が並大抵ではない。清盛はそういう人物であった。精力的で、猪突猛進で、ときには度を越えた横行に出ることもあった。だがそれ以上に人一倍懐が深く、たとえば、平治の乱で宿敵源義朝が倒れたとき、その愛妾だった常盤を自身の妾として保護し、本来ならその時点で始末すべき嫡子頼朝に慈悲をかけて伊豆配流という刑ですまし、義経をふくむ常盤の三人の男子もすべて助命した。源氏の嫡子を助命することに、清盛にとっての利益はまったくなかった。

潔い性格で、自分ばかりの独裁政権のならないよう、臣下への配慮を欠かさないが、真髄は一匹狼。

「権力に屈せず、何者にもとらわれず、ただ己の生きたい道を行く」

閨呈は一武将のそんな姿勢に好感をもった。清盛は、自分がくだらないと見限ったこの世を、晴れ晴れしいほどに謳歌する。そこには一片の影もない。それが無知ゆえのものだとはわかっていたが、自分と絶対的に違う人間の姿は、すべてが鮮やかで圧倒的だった。それまで侮蔑の対象だった、人間の土くさい欲望や現世への執着心が、何故か清盛の手にかかると、熱い血潮の輝きを彷彿とさせるから、不思議だった。

「面白い」

生まれてはじめて抱いた好奇心。閨呈はさしあたっての時間つぶしが見つかった。

それから、二十年の歳月が流れようとしている。

淡い水彩絵の具を溶かしこんだような透明な夜空を背に、晩秋の香りただよう今宵の竜神池は、浅い眠りに朦朧とうかぶ水鏡のようだった。魂の墓場　そう呼ぶにふさわしい静寂の世界が横たわり、生ある世界にあってまったく異質な空間をつくりだしている。

ああ、目覚めることのなんと心地よいことか。

その男、は憂いをたたえた虚ろな碧眼で、月を欠いた夜空をぼやかすように眺めながら、束の間の解放感に酔いしれていた。

長い眠りに沈んでいるあいだ、幾つもの短く切れ切れな夢が戯れては消え、戯れては消えていった。しかし今宵は現実世界に戻り、生ある実感と、大好きな酒の味を噛みしめることができる。そのなんと幸福なことか。

男が池の上を「歩く」と、水面は流動物であることを思い出したように波打った。白雪の肌に白い衣をまとい、星屑の微粒子をちりばめた銀髪が、ゆるやかな歩調に合わせてたつぷりと揺らぐ。男は対岸に用があった。今やくたびれた石壁と化した、友の魂の存在を刻んだ記念碑に、両手一杯の水とつまらない言葉をかけてやるのが、ここ数百年固定された、彼の寝起き一番の習慣となっていた。

「大僧正日向永翠」の文字を前に、皮肉を含んで微かに笑う。両眼の碧をくもらすのは、三百年の歳月が過ぎ去った今でも決して薄れることのない哀惜の陰影である。

「…永翠、俺のやっているこれは慈善活動か？」笑んだ口元から鋭い犬歯がのぞく。

「ああ、らしくないだろうな。かつて魔界中をおのき震わせた碧狼族 - へきろうぞく - の首領は、人間界へ追放されたあげく、人間の小僧に骨抜きにされて、ポーンスカウトまがいの墓守に落ち着き、果てには三百年も亀の姿でくすぶっているときている」

そのまなざしは溜め息とともに天へと送られた。黒々と繁る梢がぼっかりと開けて、遙か彼方の星空は音もなく子守歌を歌う。

年のせいかどうかとも感傷に浸ってしまっていけない

男が元の姿をとどめていられるのは、新月の晩、その僅か数時間のあいだだけなのであった。翌日の朝日を浴びた瞬間、四百と飛んで五十歳の若々しい引き締まった肢体は、ものの数分にも満たないうち、武骨な動く岩石「縄文亀」へと変貌してしまうのだ。また、それとともに昏睡状態に入ってしまったため、そうならばもう次の新月の晩まで、宛てもなく虚構の夢幻をただよい続けなければならぬ。生きながら死んでいるようなものである。

友の絶命をもって自らを呪詛に縛した、この男の名は白夜・びやくや・という。

水の際に腰を休めると、酒も切れかけた陶製の徳利を片手に、そのままぐいと喉へ流した。そうして釈迦が蓮池から下界の罪人を傍観する要領で、水鏡に映った己の姿を見下ろし、思いに沈むのであった。こんな生産性のない夜を何度繰り返したことが。それこそ死ぬことさえ忘却しつつある。

「神はなぜ未だに俺を生かしておく？ 生あるものに意味があるなら、あるいはこれは死であるのか？」

等身大の氷細工さながら冷艶な男は、高尚な老詩人を気取って謡吟すると、暗闇に浮かびあがる白い両脚をしなやかに組みかえた。その気になればいつだって生を終わらせた。投げ出して惜しい命ではない。だが、彼の友は永遠にここを動けない。肉体こそ消滅しても魂の転生はなくこの池に繋がれている。そう思うとどうすることもできなかった。

白夜は小さく身震いした。

深山の冷気が彼の背筋を撫でたのではなく、風使いを常に取り巻いている妖気の風が、何かの違和感を察知して主にそれを伝えたのだ。

夜露にしっとりとした草地に、深夜の訪問客は音もなく降りたっ

た。白夜とつり合う長身の男性で、修行僧の格好に、頭に深編笠をのせ、目から上をすっぽりと覆い隠している。

池を挟んで相對する二つの影が相手に向けて片手を翳したのは同時であった。見えていれば直径十メートルを優に超すだろう圧縮された気圧の塊が、高速でぶつかり合い、爆発する。その衝撃波は周囲をぐるりと囲んだ老杉をばきばきと倒し、池の水を噴きあげ散弾銃の豪雨に変えた。

「お久しぶりです、師匠」招かれざる珍客は平然と言った。「厚遇恐れ入ります」

「…俺はいま非常に機嫌が悪い。事によっては殺すぞ、小僧」

白夜は乱れた銀髪を優雅な手つきでかきあげると、視線で斬撃をなすた。

日向閔呈は笠を脱ぎ、束ねた長髪をさらりと肩に落とした。砕け散った徳利をちらりと一瞥したが、その瞳には何も映っていないようである。

「至福の一杯を邪魔してしまったようですね」

「ふん…わかつているなら早く用件を言え」

「私は妙高山へ行きます」

白夜は目を細めてかつての弟子を見つめた。弟子の薄氷がはったような無表情から、その一枚下にある何かを見出だそうとする時の、それは師の癖であった。

「…お前の口から将来の夢を聞ける日が来るとはな」

「阿修羅の一派が協定を持ちかけてきました」

「ほう…」白夜は鼻で笑った。「阿修羅といえはかつて妙高山を追放された異端の神。我が馬鹿弟子はいつから魔神の目にとまるほどの身分になったか」

「貴方が如意宝珠を欲しているのは知っている」閔呈の口調はあくまで穏やかである。

「妙高山に住む聖神、金翅鳥・こんじちょう・の額の如意宝珠には、万物を癒し還元させる力があるという。この池から永翠と紅竜

毅の魂を開放することも叶いましょう」

「無口なお前が今日は随分と多弁なのだ。私の勧誘は必至とみえる」

「同朋は多いに越したことはないかと」

「ふん…あそこについて全くの無知というわけではなさそうだ」

白夜の挑発するような冷笑がふつと消えた。「だが断る」

二人は切り結ぶように視線を交差した。

「俺は阿修羅の思想は好かん。まさかそれを知らずに盃を交わしたのではあるまい」

「私が求めるのは水先案内人としての用途のみ」

「ふん…この万年不感症め」

白夜は頬をひくつかせた。

「では貴方はここで酔生夢死するがいい」

閨呈はあっさり立ち去りかけた。この毒舌家は口でどう言おうが最終的に必ず身をひるがえすことを、彼の元で過ごした長い年月が確信させていたからである。閨呈は、かつて師と仰いだ大妖怪と自分の先祖との間に、切っても切れない絆があることをよく知っていた。

「次の新月にまたお会いしましょう」

振り向く動作もなく一間の距離を行くと、空間に塵気楼が生じ、閨呈はその中へ飲み込まれて消えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9762a/>

---

天翔天女 サザンドリフト

2010年10月9日03時44分発行